

馬場遺跡・鬼塚遺跡
出雲井古墳群発掘調査概要

1984. 3.

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市内には数多くの埋蔵文化財の存在が知られております。近年、土木建築工事が増加の一途をたどり、遺跡内においても、工事の届出が急増しております。

このような状況の中で、今回3件を対象に国庫ならびに府費の補助を受け、昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業として、馬場遺跡、鬼塚遺跡ならびに出雲井古墳群の発掘調査を実施しました。

馬場遺跡の調査では、近世の遺構を検出し、古墳時代のみならず、後世まで集落が営まれていたことが判明しました。

鬼塚遺跡では弥生時代後期、奈良時代の柱穴等を確認し、遺跡がさらに広がり、集落の変遷を考えるうえで重要な知見を得ることができました。

また、出雲井古墳群の調査では、古墳以外にも古墳時代から安土桃山時代の遺構が存在し、枚岡神社の神宮寺との関連をうかがわせる資料も得られました。

調査の実施、報告書の作成にあたっては、各方面からの多大なるご協力を賜わり、関係各位にお礼申し上げると共に、本書が広く活用されることを願うものであります。

昭和59月3月

東大阪市教育委員会

教育長 木寺 宏

例　　言

1. 本書は東大阪市教育委員会が昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業として、園庫ならびに府費の補助を受け、発掘調査を実施した、馬場遺跡、鬼塚遺跡、出雲井古墳群の調査報告書である。
2. 調査の期間は馬場遺跡が昭和58年6月27日より7月1日、鬼塚遺跡が昭和58年7月4日より8月12日、出雲井古墳群が昭和58年12月12日より昭和59年3月5日までであり、その後整理作業を行った。
3. 調査の主体である東大阪市教育委員会事務局文化財課の調査関係者は次のとおりである。

社会教育部参事（文化財課長）	寺澤　勝
文化財課長代理	吉田　照博
同　課主査	原田　修
同　課主任	下村　晴文
同　課	才原　金弘
同　課	上野　利明
同　課	成尾セツ子

4. 馬場遺跡、鬼塚遺跡は才原金弘が担当し、出雲井古墳群は上野利明が担当した。
5. 本書の作成は、それぞれの担当が行った。

目 次

第1章 調査の経過.....	1
1. 馬場遺跡.....	1
2. 鬼塚遺跡.....	1
3. 出雲井古墳群.....	1
第2章 馬場遺跡の調査.....	3
1. 遺跡の概要.....	3
2. 層序.....	4
3. 遺構.....	5
4. まとめ.....	5
第3章 鬼塚遺跡の調査.....	6
1. 遺跡の概要.....	6
2. 層序.....	7
3. 遺構.....	8
4. 出土遺物.....	10
5. まとめ.....	14
第4章 出雲井古墳群の調査.....	15
1. 遺跡の概要.....	15
2. 4号墳の調査.....	16
3. 5号墳の調査.....	18
4. その他の遺構.....	21
5. 出土遺物.....	22
6. まとめ.....	27

図版目次

図版1 馬場遺跡造構	1. 第1トレンチ ピット1・2 2. 第2トレンチ 落ち込み1、土塙1
図版2 鬼塚遺跡造構	1. 第1トレンチ 溝1 2. 第1トレンチ ピット1~4
図版3 鬼塚遺跡造構	1. 第2トレンチ 溝2、土塙1 2. 第2トレンチ ピット5~8
図版4 鬼塚遺跡造構	1. 第3トレンチ 土塙2・3、ピット9~13 2. 第2トレンチ 東壁断面
図版5 鬼塚遺跡遺物	1. 繩文土器、弥生土器
図版6 鬼塚遺跡遺物	2. 弥生土器 1. 土師器、瓦器

2. 須恵器
- 図版7 出雲井古墳群遺構 1. 調査地全景
2. 調査地全景
- 図版8 出雲井古墳群遺構 1. 4号墳全景
2. 4号墳南トレンチ第3層壁出土状況
- 図版9 出雲井古墳群遺構 1. 5号墳全景
2. 5号墳奥壁
- 図版10 出雲井古墳群遺構 1. 5号墳玄室右側壁
2. 5号墳玄室左側壁
- 図版11 出雲井古墳群遺構 1. 5号墳羨道左側壁
2. 5号墳羨道右側壁
- 図版12 出雲井古墳群遺構 1. 5号墳玄門部
2. 5号墳玄室天井石
- 図版13 出雲井古墳群遺構 1. 5号墳東トレンチ裏込め石検出状況
2. 5号墳北トレンチ墓埴輪出状況
- 図版14 出雲井古墳群遺構 1. B1トレンチ遺構検出状況
2. 4号墳N E区遺構検出状況
- 図版15 出雲井古墳群遺物 紙恵器、土師器、黒色土器
- 図版16 出雲井古墳群遺物 黒色土器
- 図版17 出雲井古墳群遺物 黒色土器、瓦器
- 図版18 出雲井古墳群遺物 1. 土師器、製甕土器
2. 土師器

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2	第14図 遺物実測図	13
第2図 遺跡周辺図	3	第15図 遺跡周辺図	15
第3図 調査地点位置図	4	第16図 調査地点位置図	16
第4図 断面実測図	4	第17図 4号墳トレンチ位置図	17
第5図 遺構平面実測図	5	第18図 4号墳トレンチ断面実測図	18
第6図 遺跡周辺図	6	第19図 5号墳トレンチ位置図	19
第7図 調査地点位置図	7	第20図 5号墳石室上面実測図	20
第8図 断面実測図	8	第21図 5号墳石室実測図	折り込み
第9図 第1トレンチ遺構平面実測図	9	第22図 5号墳トレンチ断面実測図	21
第10図 第2トレンチ遺構平面実測図	9	第23図 遺物実測図	23
第11図 第3トレンチ遺構平面実測図	10	第24図 遺物実測図	24
第12図 遺物実測図	11	第25図 遺物実測図	25
第13図 遺物実測図	12		

第1章 調査の経過

1. 馬場遺跡 昭和58年6月、馬場遺跡内にあたる日下町2丁目1465番地において木造住宅の建設を実施したいとの旨、届出があった。建設予定地のすぐ西側は昭和36年の調査の際に古墳時代の堅穴住居跡や石凝寺の瓦と考えられるものが出土している。^①今回の予定地は前回と同様の時期の遺構、遺物が出土する可能性があったので試掘調査を実施することになった。建設予定地は45m²あり、この予定地内に2ヶ所のトレンチ（計9m²）を設定した。調査は6月27日～7月1日まで実施した。

調査した結果、古墳～奈良時代の遺構、遺物は検出できなかった。近世のピット、土塁、落ち込みを検出したのみである。

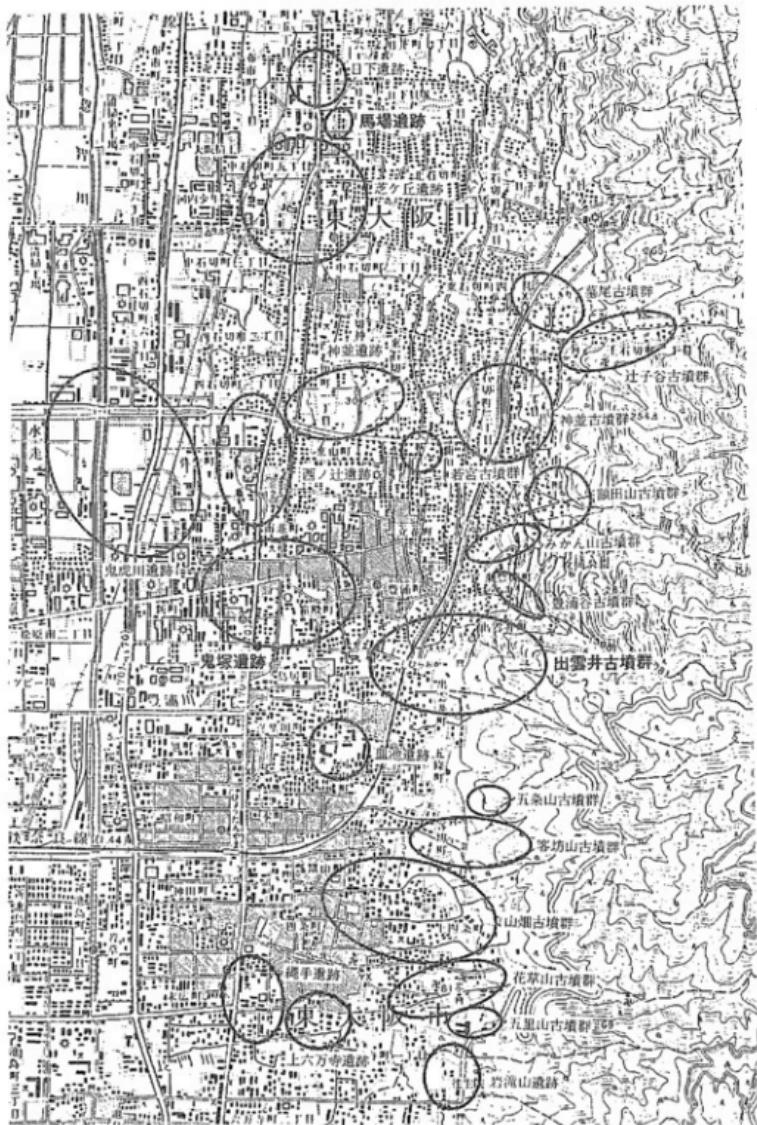
2. 鬼塚遺跡 昭和58年5月、鬼塚遺跡の南東に位置する箱殿町610-1番地において、分譲住宅建設の届出があった。当地点は遺跡の範囲内にあり、遺構、遺物が出土することが予測された。建築物の基礎は浅く遺跡への影響は無いと考えられたが、開発者の協力を得て範囲確認の試掘調査を実施した。工事予定地は582m²あり、この予定地内に3ヶ所のトレンチ（計42m²）を設定した。調査は7月4日～8月12日まで実施した。

調査した結果、第1・第3トレンチの2ヶ所で部分的な搅乱を受けているが、地表下40cmで縄文～歴史時代の遺物包含層を検出した。遺物包含層は2層に分層でき、上層は古墳～奈良時代、下層は縄文～弥生時代の遺物を含んでいた。また、弥生時代後期と奈良時代の遺構を確認した。今回の調査地は部分的な搅乱を受けているものの遺構の保存状態は良好であり、周辺には集落が広がっていることが考えられる。

3. 出雲井古墳群 昭和58年11月に出雲井古墳群が分布する、出雲井町、出雲井本町、五条町にまたがる地点で共同住宅建設の計画が届けられた。建設予定地は約10,000m²を越え、予定地内には2基の古墳が存在するため、事前の協議を行い、古墳を保存整備する方向で合意した。本古墳群は現在9基が確認されており、市内に所在する小規模な古墳群の中でも保存状態の良い古墳群である。しかしながら、現在に至るまで発掘調査は行われず^②に、一部の研究者によって石室等の実測が行われたのみであった。こうした点から、調査は古墳の規模を究明することと、保存整備を前提として石室内の精査を行うこととした。

また、予定地周辺は、枚岡神社南側にあたり、文献等で枚岡神社の神宮寺である神護寺、来迎寺など寺跡が存在する可能性が考えられたため、古墳周辺のみならず、予定地内全域について合計14ヶ所のトレンチを設定した。

調査は昭和58年12月12日～昭和59年3月5日まで実施した。調査面積は約200m²である。古墳以外のトレンチでは、古墳時代から安土・桃山時代の遺物、遺構を検出した。遺物の中には室町時代の瓦類が含まれており、前述の寺跡の可能性がうかがえるものであった。



第1図 遺跡分布図 (1/25000)

第2章 馬場遺跡の調査

1. 遺跡の概要

馬場遺跡は東大阪市日下町に所在する古墳～奈良時代の複合遺跡である。当遺跡は生駒山より流出してきた扇状地の上端に位置し、標高25～30mを測る。当遺跡のすぐ北には日下川が流れしており、この川が当遺跡の北限となる。また、北側には日下遺跡が広がっている。日下遺跡は縄文～古墳時代の複合遺跡である。当遺跡は大阪府下でも数少ない貝塚の一つとして著名である。^④また、当遺跡の南には同じく縄文～古墳時代の遺跡である芝ヶ丘遺跡が存在する。当遺跡では古墳時代の井戸、ピットなどが確認されている。馬場遺跡の北及び南には古墳時代の遺構が広範囲に広がっており、これは扇状地上に点々と集落が形成されていたことをうかがわせる。

馬場遺跡の調査は昭和36年に実施されてからその後、ほとんどおこなわれていない。昭和36年^⑤の調査では古墳時代の隅丸方形を呈する竪穴住居跡1棟が検出された。住居跡内からは土師器の壺や須恵器の高杯、蓋などが出土している。また、奈良時代の瓦が帶状を呈した状態で出土している。これらの瓦は『続日本記』、『行基年譜』に名のみえる石凝寺のものと考えられている。今回の調査地は昭和36年の調査地のすぐ東に位置し、古墳～奈良時代の遺構が存在することが充分考えられた。



第2図 遺跡周辺図 (1/2500)



第3図 調査地点位置図

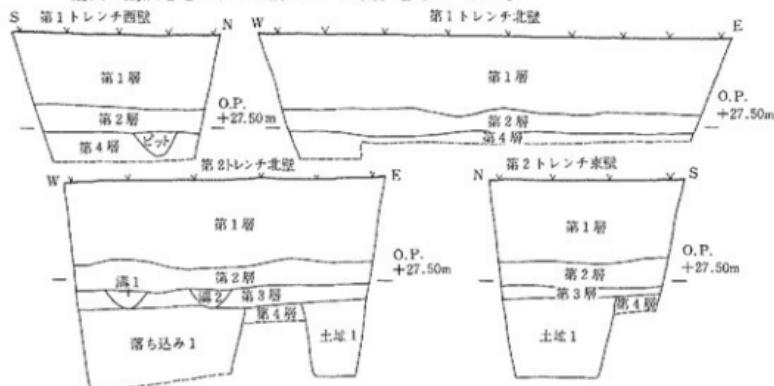
2. 層序

第1、第2トレンチにおける堆積状況はおおむね同様である。ただ第2トレンチで認められる第4層が第1トレンチでは欠層となる。以下、各層ごとに説明を記す。

第1層 盛土、層厚60cm。

第2層 旧耕土、層厚20cm。

第3層 灰オリーブ色（5 Y5/2）砂礫混りシルト、礫2～5cm程度のものを少量含む。第3層上面は鈎痕と思われる小溝のベース面。層厚10～15cm。



第4図 断面実測図 (1/4)

第4層 明褐色(7.5YR5/8) 碓混りシルト、礫は10~20cm程度のものを多く含む。第4層上面は近世の遺構ベース面。

3. 遺構

第1、第2トレンチで若干の遺構を検出した。以下、各トレンチごとに遺構の説明を記す。

第1トレンチ

第1トレンチでは第4層上面でピットを2ヶ所検出した。トレンチ西側で検出し、ピット1は径30cm、深さ10cm、ピット2は径20cm、深さ15cmを測る、いずれも浅い。ピットの明確な時期は決定できないが近世のものと考えられる。

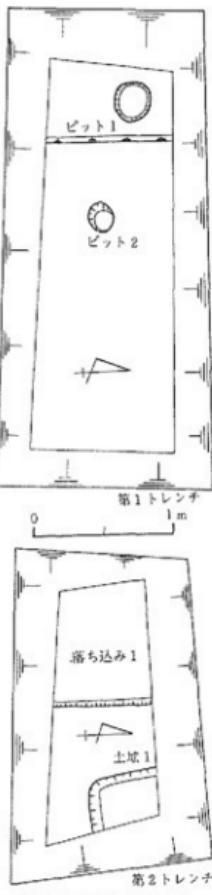
第2トレンチ

第2トレンチでは第3層上面で小溝と第4層上面で落ち込み1と土塙1を検出した。小溝は2本検出した。溝は共に南北方向に伸び溝1・2とも幅30cm、深さ15cmを測る。溝内には旧耕土が堆積しており、耕作時の跡痕と考えられる。落ち込み1はトレンチ西側で検出した。トレンチ外に遺構が広がるため規模は不明であるが、深さ60cmを測る。土塙1はトレンチの南東隅で検出した。全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。一辺が50cm以上、深さ60cmを測る。落ち込み1、土塙1の時期は落ち込み1内から出土した陶器からみると、近世の時期である。

4.まとめ

馬場遺跡は昭和36年の調査の際に古墳時代の竪穴住居跡1棟と奈良時代の瓦が出土したことから知られるようになった。奈良時代の瓦は『続日本記』『行基年譜』に名の見える石凝寺のものと考えられている。これらの遺構・遺物が出土した地点は、今回、調査を実施した地点のすぐ西に位置する。そのため、今回の調査地でも同様な状態で遺跡が存在する可能性が高かった。今回の調査地では旧耕土を排除するとすぐ地山になり、この面で近世の遺構を検出した。第1トレンチではピット、第2トレンチでは落ち込みと土塙がある。古墳~奈良時代の遺構・遺物は出土しなかったが、周辺部の地形は段々になっており、近世以降に削平を受けた可能性が強い。また、近世の遺構検出状況からみても東側には遺構がなく削平を受けている状態がわかる。

今回、馬場遺跡の明確な遺構・遺物は検出できなかったが、今後、周辺部の調査成果に期待したい。



第5図 遺構平面実測図

第3章 鬼塚遺跡の調査

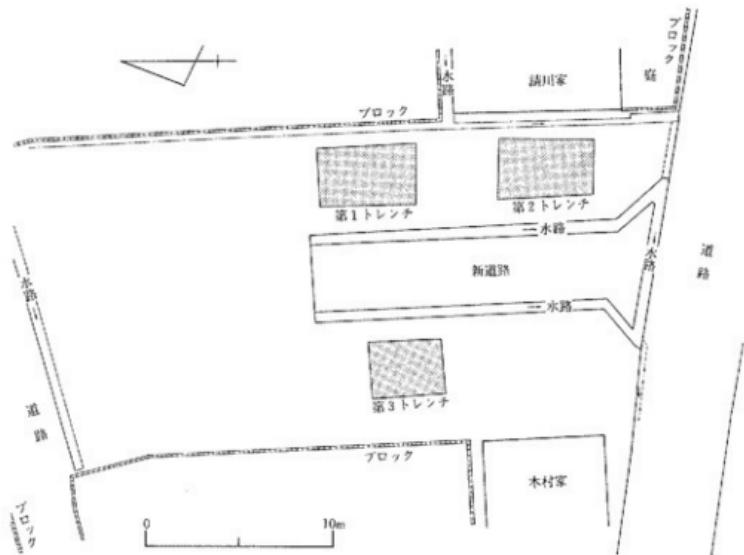
1. 遺跡の概要

鬼塚遺跡は東大阪市箱崎町に所在する縄文～平安時代の複合遺跡である。当遺跡は生駒山の谷筋より流出した土砂によって形成された複合扇状地上に立地し、標高15～20mを測る。昭和35年、枚岡電報電話局建設工事（A地点）がおこなわれ、この際、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が採集され当遺跡が知られるようになった。また、昭和40年には枚岡農協建設工事（B地点）中に縄文晩期の土器や土偶が採集された。その後、本格的に調査が実施され、数々の新知見が得られ、今日に至っている。当遺跡の調査は昭和43年に初めて実施されている。調査地（C地点）は枚岡電報電話局の北側であり、弥生時代後期の壇棺2基が確認された。また、昭和53年～昭和54年の二次に渡る調査（E地点）では上屋が焼け落ちた状態で弥生時代後期の竪穴住居跡1棟や奈良～平安時代の柱穴が検出されている。昭和57年の調査地（F地点）では縄文時代の溝や弥生時代の方形周溝墓が確認されている。当遺跡が縄文時代より集落が営なまれていたことがより明確になりつつある。

今回、調査地は昭和54年に実施されたE地点の南100mに位置する。またD地点より東25mに位置し、当遺跡の南東にあたる。調査予定地では縄文、弥生時代の遺構、遺物が出土することが予想されたので調査を実施した。



第6図 遺跡周辺図(1/5000)



第7図 調査地点位置図

2. 層序

第1～第3トレンチにおける堆積状況は各トレンチで若干の層厚差は認められるが、ほぼ同様な状態を示す。以下、各層ごとに説明を記す。

第1層 盛土、層厚20cm。

第2層 旧耕土、層厚15～20cm。

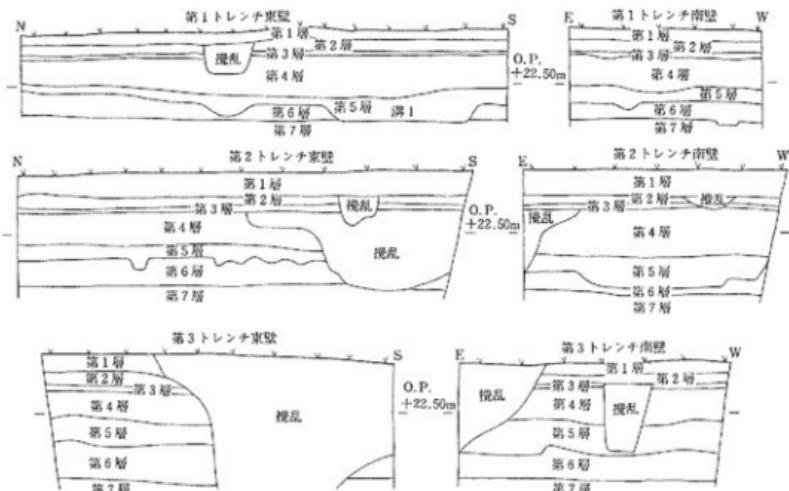
第3層 明黄褐色(2.5Y 6/6)シルト、旧水田の床土であり、層厚5～10cm。

第4層 黄オリーブ色(5 Y 5/3)シルト、この層内より古墳時代～中世の土器が少量ではあるが出土した。土器の大部分は細片で、磨滅も著しい。層厚30～50cm。

第5層 暗灰黄色(2.5Y 4/2)礫混りシルト、2～5cm前後の中礫を比較的多く含む。この層内より古墳～奈良時代の土器が出土した。層厚10～30cm。

第6層 黒色(10Y R1.7/1)砂混り粘土、粘性が弱く、炭化物を含む。この層内より绳文～弥生時代の土器が出土した。第6層上面は奈良時代の生活面である。層厚20～30cm。

第7層 黄褐色シルト質粘土、第7層はいわゆる地山である。第7層上面は弥生時代後期の生活面である。この面は北東から南西に向けて傾斜しており、第1トレンチと第3トレンチでの比高は0.4mである。



第8図 断面実測図(1/60)

3. 造構

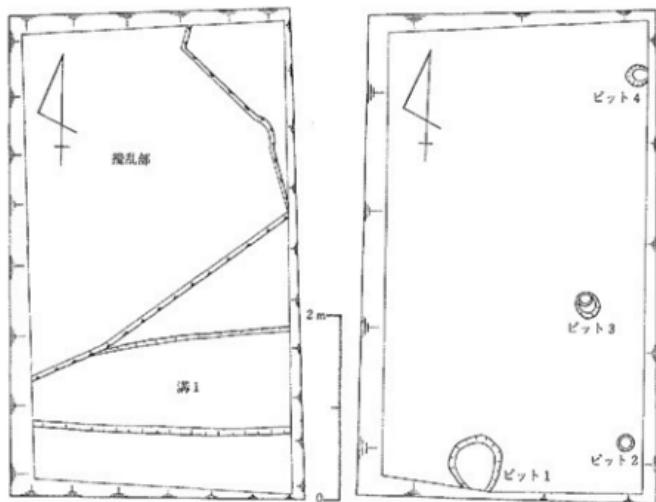
弥生時代後期の遺構は第1～第2トレンチ、奈良時代の遺構は第1～第3トレンチで検出した。以下、各トレンチごとに遺構の説明を記す。

第1トレンチ

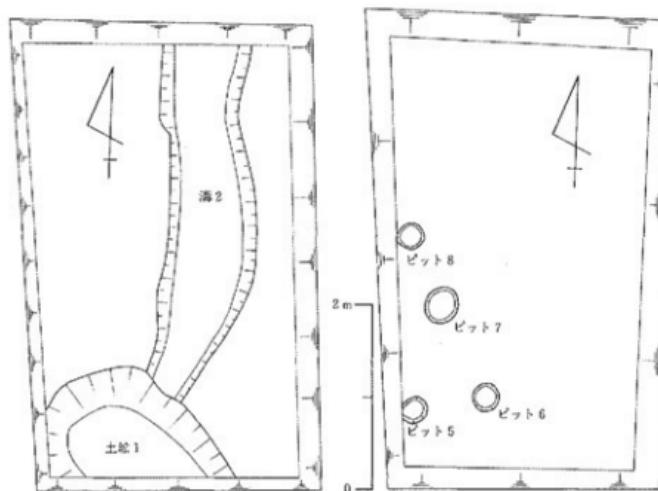
第1トレンチでは第6層上面で奈良時代の溝、第7層上面で弥生時代後期のピットを検出した。トレンチの北側半分はすでに擾乱を受けており、南側半分のみに遺構が確認できた。第6層上面で検出した溝1は東西方向に伸び、西へいくにしたがい幅が狭くなる。溝は東側で幅1.2m、西側で幅0.9m、深さ10mを測る。第7層上面で検出したピット1～4は円形を呈し、ピット1は径60cm、深さ10cm、ピット2は径20cm、深さ10cm、ピット3は径30cm、深さ15cm、ピット4は径30cm、深さ20cmを測る。ピット3のみが二段落ちである。

第2トレンチ

第2トレンチでは第6層上面で奈良時代の溝と土塙、第7層上面で弥生時代後期のピットを検出した。第6層上面で検出した溝2は、やや蛇行しながら南北方向に伸び、南側にいくにしたがい幅が狭くなる。南側で土塙1によって溝2は切られている。溝は北側で幅1m、南側で幅0.5m、深さ15cmを測る。土塙1はトレンチ南西隅で検出したが、遺構の半分以上は調査地外にある。平面形は橢円形を呈すると考えられる。深さ25cmを測る。第7層上面で検出したピット5～8は、調査地南西部に集中していた。ピット5は径30cm、深さ8cm、ピット6は径30cm、深さ8cm、ピット7は径40cm、深さ7cm、ピット8は径30cm、深さ6cmを測る。



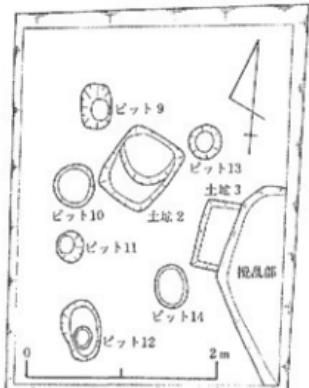
第9図 第1トレーニング構造平面実測図（左第5層上面・右第6層上面）



第10図 第2トレーニング構造平面実測図（左第5層上面・右第6層上面）

第3トレンチ

第3トレンチでは第6層上面で奈良時代の土塙とピットを検出した。トレンチの南東隅はすでに擾乱を受けていた。土塙2は平面形が隅丸方形を呈し、北側が二段落ちである。長辺0.8m、短辺0.65m、深さ25cmを測る。土塙3は東側が擾乱を受けているが、平面形は方形を呈すると考えられる。一辺が0.75m、深さ30cmを測る。ピット9～14は平面形が円形ないしは梢円形を呈する。ピット9は長径50cm、短径30cm、深さ20cm、ピット10は径45cm、深さ40cm、ピット11は径35cm、深さ20cm、ピット12は長径65cm、短径40cm、深さ30cm、ピット13は径35cm、深さ10cm、ピット14は長径45cm、短径35cm、深さ10cmを測る。ピット12のみ二段落ちである。



第11図 第3トレンチ造構平面実測図
(第5層上面)

4. 出土遺物

第1～第3トレンチの各トレンチで遺物が出土した。しかし、遺物の出土量は少なく、破片が大部分である。出土土器は縄文時代～歴史時代までのものがある。以下、各遺物について説明を記す。

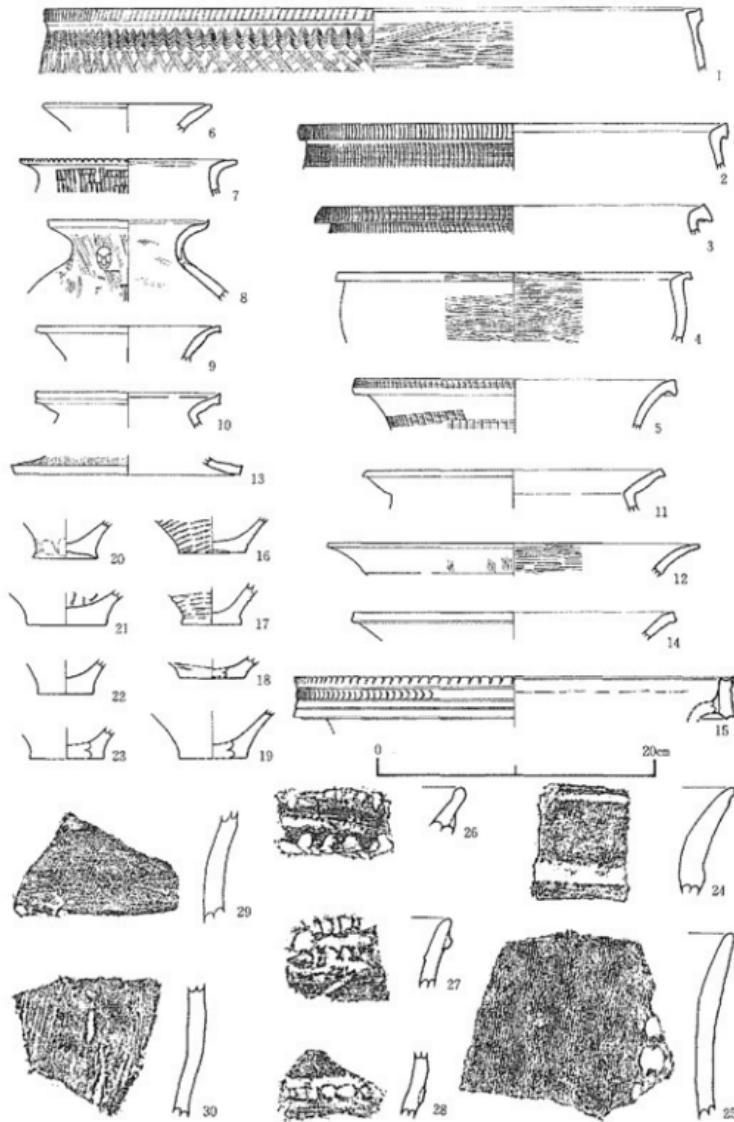
縄文土器(第12図、24～30)

縄文時代の土器は24～30であり、いずれも破片である。24は口縁部下端と頸部にそれぞれ一条の凹線をめぐらす。25は口縁端部にキザミ目、頸部に縱方向の竹管文を施す。26・27は口縁下端に一条の凸帶をめぐらす。口縁端部と凸帶にはキザミ目を施す。28は頸部に一条の凸帶をめぐらし、凸帶にキザミ目を施す。29・30は頸部及び胴部の破片であるが、29は外面をナデ調整、30はケズリ調整する。

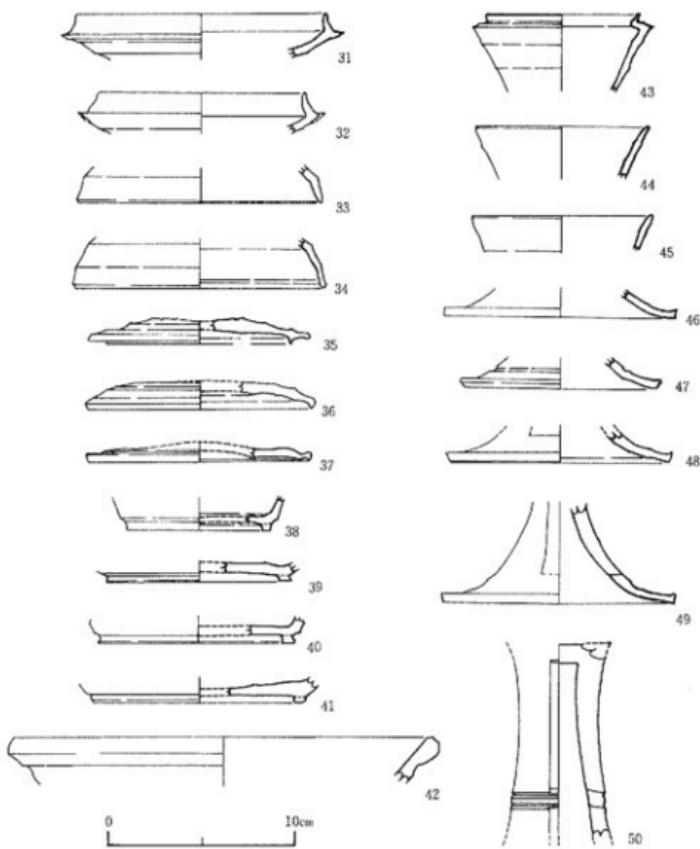
弥生土器(第12図、1～23)

壺 5・6・8・9・14・15は壺である。6は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が面をもつ。口頸部外面をナデ調整する。5は頸部が漏斗状を呈し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端面と頸部に柳描縞状文を施す。外面の調整法は不明。8は胴部が張り、口縁部が強く外反する。口縁端部は上方へつまみあげぎみに拡張する。胴部外面はハケメ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。頸部に焼成後に小孔を穿つ。9・14は口頸部が大きく外方へ開き、口縁端部が面をもつ。口頸部外面はナデ調整する。15は口縁部を上下へ拡張する。口縁端部に3条の擬凹線をめぐらした後、端部上面にキザミ目、1条目と2条目の擬凹線間に半截竹管文を部分的に施す。内面には接合痕を残す。6は第Ⅱ様式、5は第Ⅲ様式、8・9・14・15は第Ⅴ様式。

甕 7・10・11は甕である。7は張りの少ない胴部より口縁部が強く外反する。口縁端部にはキザミ目を施す。胴部外面は縱方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコ



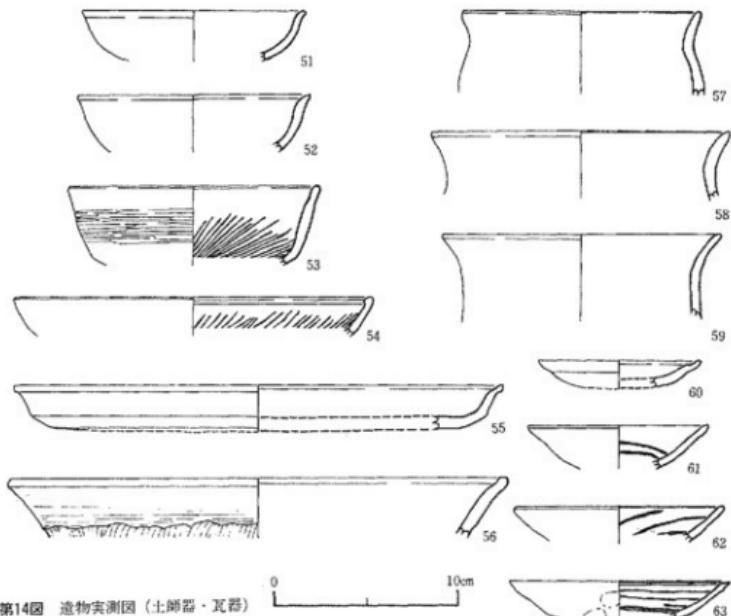
第12図 遺物実測図（縄文土器・弥生土器）



第13図 造物実測図(須恵器)

ナデの後、横方向のハケメ調整する。10・11は口縁部がくの字状に外反し、10は口縁端部を上方へつまみあげぎみに拡張し、11は面をもって終る。10は胴部外面をハケメの後ナデ調整する。7は第Ⅱ様式、10・11は第V様式。

鉢 1～4は鉢である。1は胴部上半が内傾し、口縁部が段状を呈する大型の鉢である。口縁部には列点文、胴部外面には柳描波状文とその下に柳描斜格子文を施す。胴部外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。2・3は胴部上半が内傾し、口縁部が下方へ折れ曲がる。2は口縁部に柳描列点文、胴部外面に柳描簾状文を施す。3は口縁部と胴部外面に柳描簾状文を施す。4は胴部がやや内傾し、口縁部が短く外反する。胴部外面はヘラミガキ調整し、口縁



第14図 造物実測図（土師器・瓦器）

部はハケメ調整する。いずれも第Ⅲ様式。

高杯 12・13は高杯である。12は杯部であり、杯部と口縁部の境に稜がある。杯部内外面はヘラミガキ調整する。13は脚擦部であり、外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。いずれも第V様式。

底部 16~23は底部である。大部分のものは平底であるが、16・20はくぼみ底である。外面にタタキを施す16~18とナデ調整で終る19~23がある。いずれも第V様式。

須恵器（第13図、31~50）

杯身 31・32は杯身である。杯部は非常に浅く、眉高も低い。立ち上がりは内傾しながらやや外反する。受部は水平にのびる。

蓋 33~37は蓋である。33・34は天井部と口縁部の境が不明瞭となる。口縁部はやや外方へ広がる。35~37は宝珠形のつまみがつく蓋である。35は端部内面にかえりを有する。36・37は内面のかえりが消失する。

杯 38~41は高台を有する杯の底部である。高台は断面形が台形を呈する。

臺 42は臺である。口縁部が外方へ大きくひろがり、口縁端部がやや下方へ肥厚する。

臺 43~45は臺である。43は胴部が外方へ伸びた後内傾する。口縁部は短く外反する。44・45は長頸臺の口縁部である。

高杯 48～51は高杯の脚部と縁部である。51は長脚一段すかし、52は長脚二段すかしであり、すかし間に凹線を施す。

土師器・瓦器（第14図、51～63）

杯 51～54は杯である。51～54は口縁部がやや外方へ広がり、51・52は口縁端部が外反ぎみに終る。53・54は口縁端部が内側へ肥厚する。体部内外面はナデ調整するものが大部分であるが、53は外面をヘラミガキ調整する。53・54は内面に放射状の暗文を施す。

皿 55は皿である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終る。

羽釜 56は羽釜である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終る。鉢は欠損するが帯状の接合痕が残る。胴部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

甕 57～59は甕である。張りの少ない胸部より口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。胴部内外面はナデ調整する。

小皿 60は小皿である。口縁部は内傾する。

瓦器椀 61～63は瓦器椀である。61・62は口縁部は丸く終る。63は口縁端部内面に沈線をめぐらす。体部外面は指ナデ調整する。内面には数条のミガキを施す。

5.まとめ

今回の調査で判明したことを列記してまとめとしたい。

1. 調査を実施した地点は鬼塚遺跡の南東端に位置し、当地点まで遺跡が広がっているかを確認するのが一つの目的であった。トレントを三ヶ所に設定し、調査を実施した結果、遺物包含層と遺構を検出した。明らかに当遺跡はこの地点まで存在する。
2. 今回の調査で検出した遺構面は二面あり、一面は弥生時代後期、もう一面は奈良時代である。溝、ピット、土塙などがあり、周辺部には同時期の集落が存在する可能性が高い。
3. 弥生時代後期の面は北東から南西に向けて傾斜している。南西部は谷筋になっていくと考えられる。当時の集落の中心は北東部にあると思われる。
4. 今回の調査では弥生時代後期と奈良時代の遺構を検出したが、遺物の時期は幅広い。绳文時代晚期、弥生時代中期～後期、古墳時代、歴史時代の遺物があげられる。周辺部にはこれらの時期の遺構が存在する可能性が高い。

第4章 出雲井古墳群の調査

1. 遺跡の概要

出雲井古墳群は東大阪市出雲井町、出雲井本町、五条町にかけて分布する小規模の後期群集墳である。この地域は、東大阪市の東部を南北に連なる生駒山脈から派生した尾根と、西流する小河川の堆積作用によって形成された複合扇状地の上部にあたる。古墳群は、この北西方向に派生した尾根の傾斜が緩やかになる標高約200mを最高所として、扇地上部標高約40mまで合計9基が存在する。

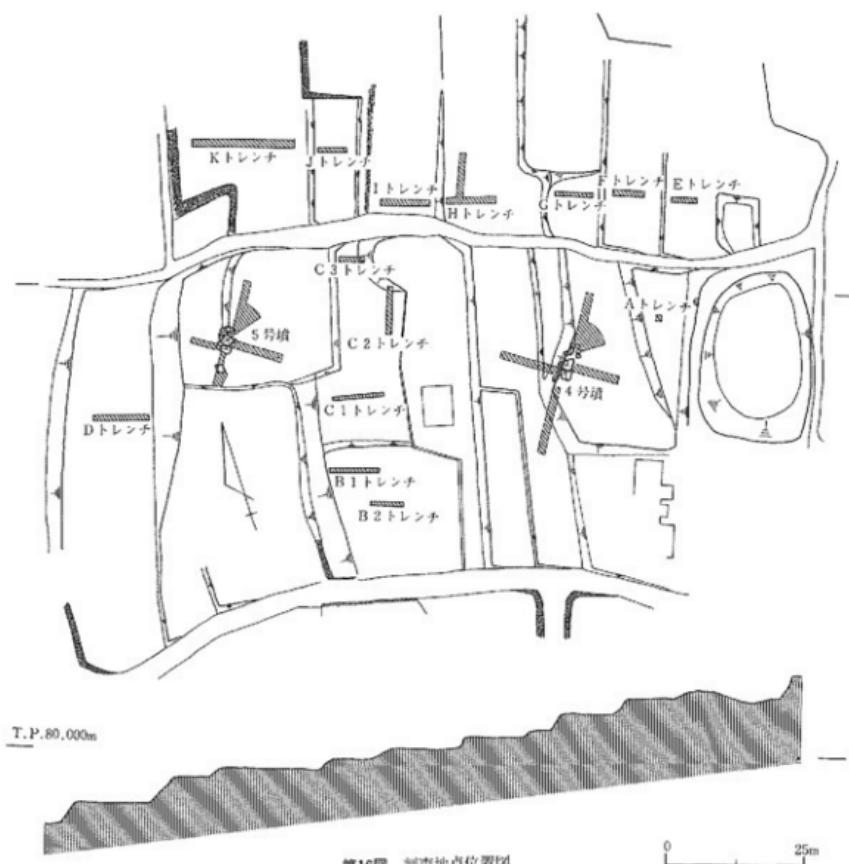
9基の古墳群はいずれも横穴式石室を有する円墳と考えられる。石室内部が観察できるのは3・5・8号墳であるが、調査例が無く正確な築造時期は不明である。8号墳については、切石の巨石を使用した石室で7世紀前半頃と考えられている。

また、この付近は古墳群の存在とともに、枚岡神社の神宮寺である神護寺や、「河内名所図絵」に見る来迎寺の存在が伝えられている。文献等の記載が少ないため、位置、存続時期は不明である。

したがって今回の調査では、古墳の確認にとどまらず、これらの寺跡の確認を含めて試掘調査を行うことにした。



第15図 進路周辺図 (1/5000)



第16図 調査地点位置図

2. 4号墳の調査

4号墳は標高87mに位置する横穴式石室を有する古墳である。保存状態は極めて悪く、墳丘が削平され、天井石、左側壁が露出している。石室は開口していない。現状は水田の開墾により約2.5mの段差がつき、その崖面に左側壁が露出している。側壁の最上段は不整列で、天井石が落ち込み、原位置を保っていない。底道は崖面に石材が露出せず、破壊されている可能性が高い。

調査は石室の主軸を推定し、主軸に合せ東西南北に4本のトレンチを設定して行った。東トレンチは古墳築造時の旧地表面まで掘削した。西トレンチは地山まで削平されており、石室の

墓塚を確認できなかつた。北トレンチは上層で15~16世紀の遺構を確認したため、ここで調査を中断した。南トレンチは崖面内に設定し、羨道・羨門の確認を目的としたが、上部の礫層内で多量の黒色土器等を検出したため、追葬、あるいは後世の祭祀の可能性が考えられ、礫層を除去した段階で調査を中断した。また、羨道左側壁の一部を確認したが原位置を保っていない可能性が高い。以下、墳丘等について東トレンチを中心記す。

墳丘

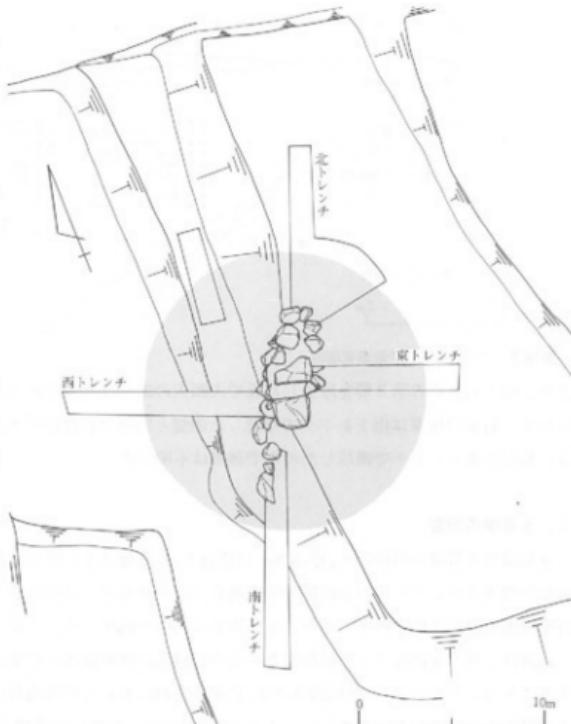
墳丘は前述したように殆ど残っていないが、第17図 4号墳トレンチ位置図

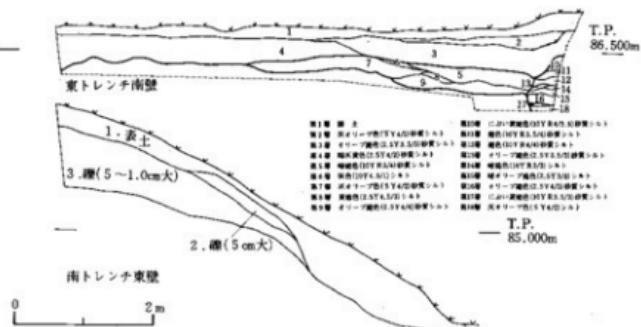
石室際のみ観察可能であった。古墳築造時の地表面の傾斜は非常に緩やかで、築造時に周囲の整地をした可能性が考えられる。墓塚はこの旧地表面より掘り込まれている。墳丘の構築は、墓塚内を水平に叩き締めながら埋め、その後、石室を構築し、石材を囲むように周囲を盛土する。その際、盛土はほぼ水平方向に叩き締めながら行われている。上部は削平のため不明である。

墳丘裾部は、第7層が盛土の東端にあるが、上層が15~16世紀の堆積層であり、裾部が削平されている可能性が考えられる。墳丘の規模は、盛土の東端を裾部と考えると、石室の主軸と予想される地点から6.3mを測り、直径約13mと推定できる。しかし、石室の規模から考えると、20m前後のものが通例であり、裾部は削平されていると考えるのが妥当であろう。

主体部・墓塚

本墳の主体部は横穴式石室と考えられる。石室は南開口で、主軸は5号墳に近くN20°W前後になると推定できる。羨道部は崖面になるため、一部（最下段と考えられる）が残存している。





第18図 4号墳トレンチ断面実測図

また、南トレンチの第3層を除去した面で人頭大の礫が散乱しており、閉塞石の可能性を考えられる。石室の規模は南トレンチで確認した側壁と周囲の石材の状況から全長9m前後であろう。墓壙は東トレンチで確認したのみで詳細は不明である。

3. 5号墳の調査

5号墳は4号墳の西約60m、標高76mに位置する。本墳は1号墳と同様に15~16世紀にすでに墳丘が削平され、その後の水田開発等で現在では天井石および左側壁の大半が露出している。石室は羨道部が土砂で埋まっているが、玄室は内部を観察することができる。

調査は、保存を前提とした試掘調査のため、封土の範囲確認と石室内の後世の流入土を除去することにとどめた。封土の範囲確認は、石室の主軸にあわせ東西南北に幅1~1.5mのトレンチを設定して実施した。東西トレンチでは、上層に15~16世紀の遺構面を検出したため、石室の周囲に限り墓壙の上面まで調査を行った。南トレンチでは、羨道側壁上部と羨門部を確認するに留めた。北側トレンチでは古墳築造時の地表面を確認した。

墳丘

墳丘は上部が削平されている。墳丘の削平は15~16世紀の遺構が造られた際に整地が行われており、この時期に石材の一部を除き現在に近い状態になったことが推定できる。したがって、北トレンチでは旧地表面より高さ約0.6mまでがほぼ築造当時の原形を保っている。封土は、先ず墓壙を掘り下げ、最下段の石材を置き、墓壙内をほぼ水平に墓壙上面まで叩き締めながら埋める。そして上部の石材を置き徐々に盛土する。この盛土は、奥壁部分では、2段目まで墳丘と同様の傾斜を持って叩き締められている。3段目以上は、ほぼ水平に盛土するようである。墳丘裾部は北トレンチで確認し、墓壙より約1.8mを測る。墳丘規模は裾部が墓壙奥壁部よりかなり短い事から疑問が残るが、直径約14~15mと推定できる。墳丘の段築・周濠等の施設は確認できなかった。

石室

石室内は明治時代以降の流入と思われる礫層が約1m堆積し、下層に墳丘削平時の流入土が堆積している。今回の調査はこの礫層を除却し、石室の計測を行った。

石室の規模は玄室長3.9m、幅1.8m、高さ2.2m、羨道長6.1m、幅1.2mを測る。羨道部の高さは大半が埋まり不明であるが玄室に比して0.9m低くなる。使用された石材は大半

が自然石で、一部に割

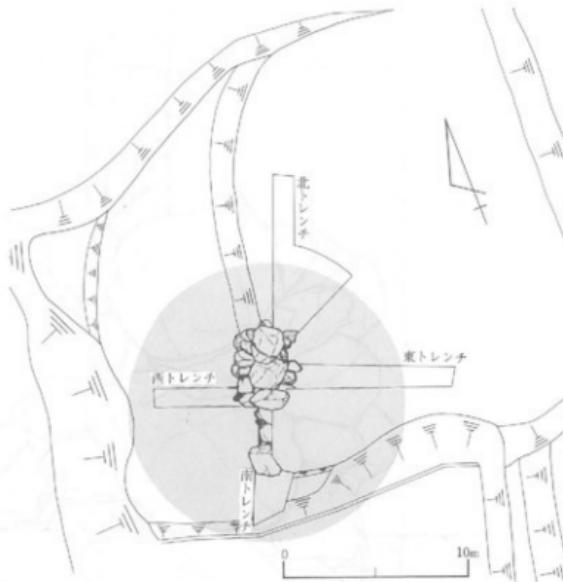
石を使用している。石材は0.4~1m程度のものが多い。石室の主軸はN20°Wを示す。

石室の構築は奥壁3段、玄室左側壁4段、右側壁4~5段、羨道部2~3段を基本とする。最下段の石材は上部のみが露出している。最下段の石材は横方向に目地がある。玄室左側壁は横方向に目地があるが、右側壁は左側壁に比して乱れている。奥壁側では4段積みで整っているが、玄門部にかけては横方向の目地がくずれて、最上段で整っている。また、この部分はこぶし大から人頭大の詰石を多數使用し、側壁を構築する。詰石の使用は、左側壁では最下段と2段目の間のみ多く使用する。羨道は大型の石材を2段に積み、さらに天井石を水平に架構するため右側壁に人頭大の石材を積む。玄室の側壁と羨道の側壁は目地がそろわらず、石室構築の際、個別に積み上げられたことが考えられる。

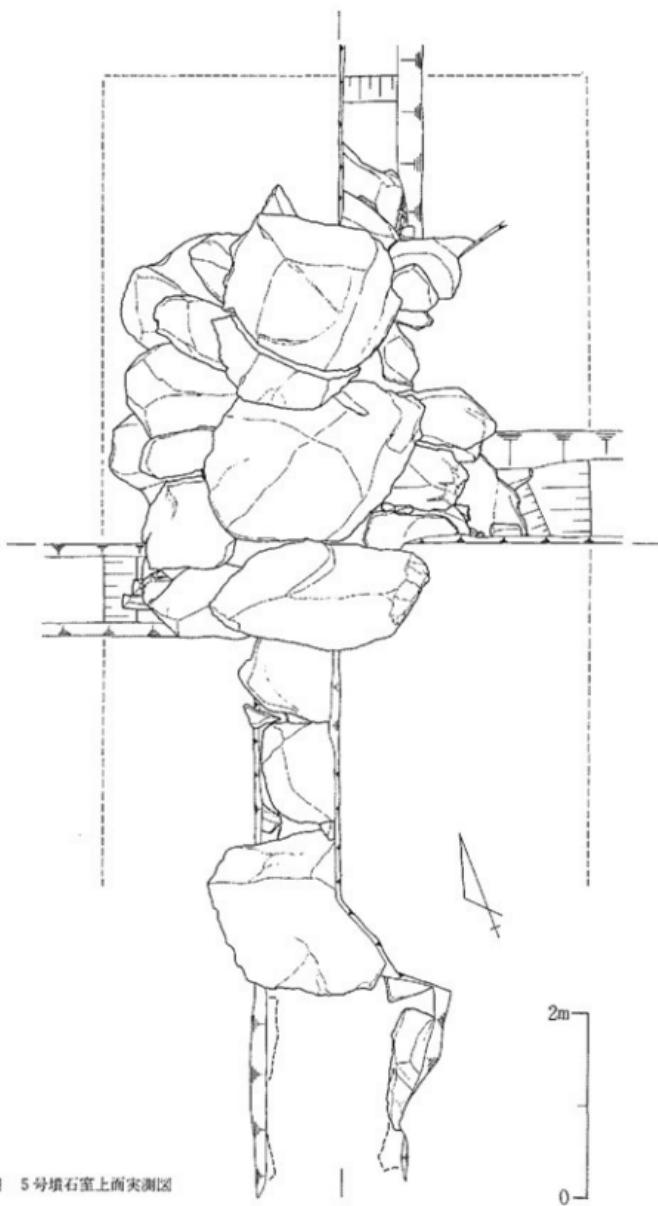
以上の事から、石室構築について下記の事が推定できる。墓壇内に奥壁および左右の袖石を置き平面形の基準を決定する。そして玄室側壁と羨道側壁とを分離して構築する。羨道側壁と、玄室側壁3段目までを積み上げたのち、袖部の天井石を架構する。天井石はこの袖部を中心として奥壁側、羨門側へ架構する。羨門部の側壁については未調査のため言及できないが、当初の平面形を決定する際に、羨門の位置についても同様の作業が行なわれていたと考えられる。

墓址

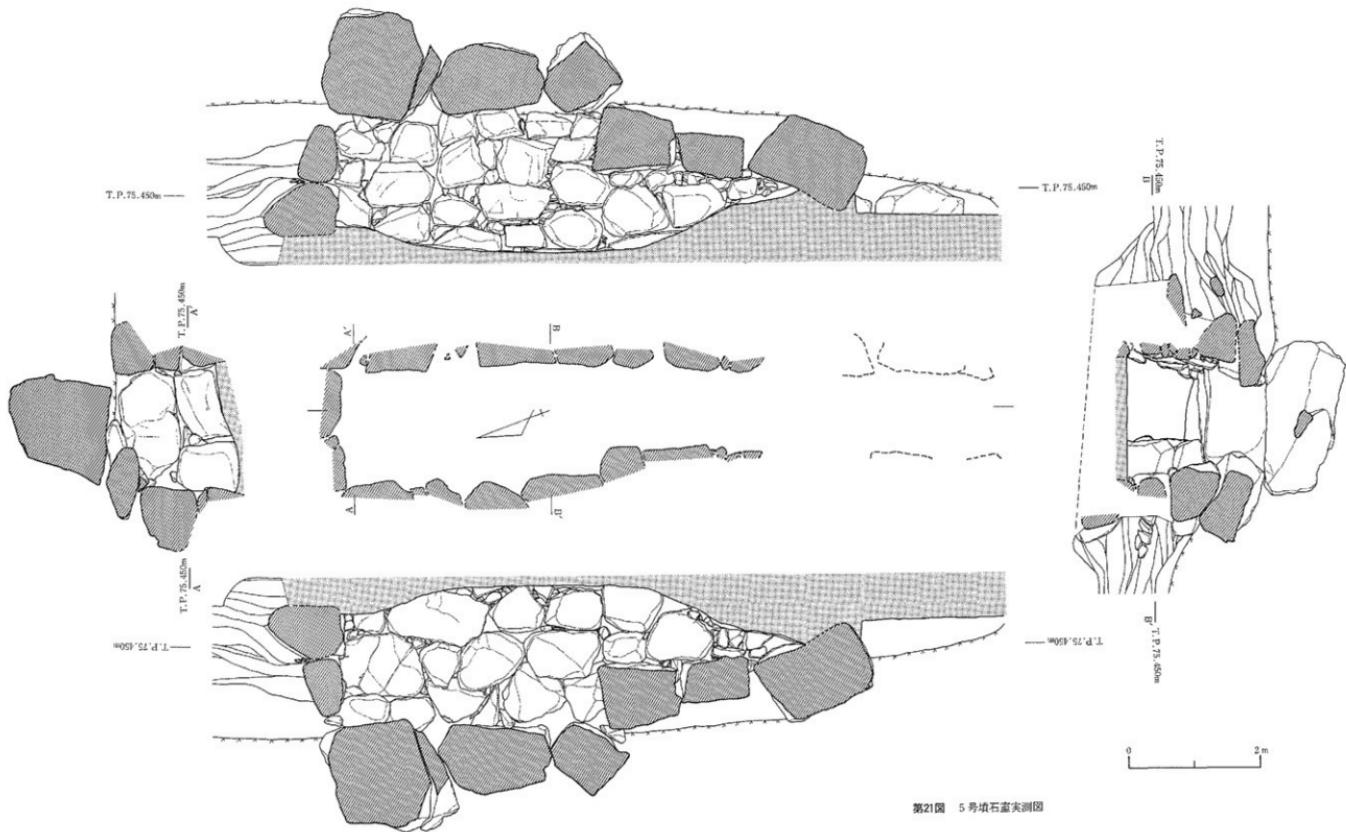
墓址は東、西、北トレンチで確認した。墓壇の幅は5.3m、深さ0.4~0.9mを測る。墓址が掘り込まれた旧地表面は東、北トレンチでは同レベルであるが、西トレンチで0.9m低くなっている。



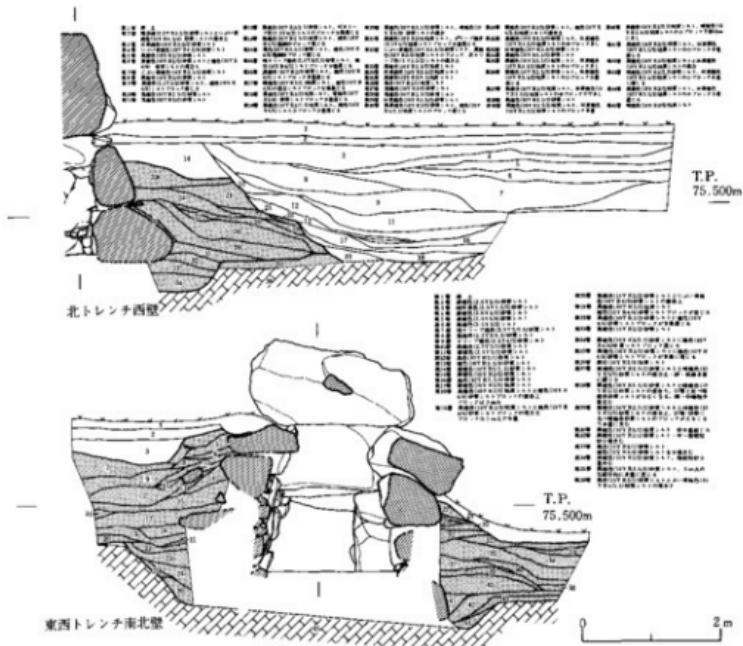
第19図 5号墳トレンチ位置図



第20図 5号填石室上面実測図



第21图 5号墓石室剖面图



第22図 5号墳トレンチ断面実測図

また、墓塚底面は南へ0.5m、西へ0.8m低くなり、かなりの傾斜をもつ。この事は、墓塚掘削の際、周囲の整地の行われた可能性をうかがわせるものであり、また、墓塚底面の傾斜は石室内の排水のためと考えられる。

4. その他の遺構

今回の調査は4・5号墳以外に枚岡神社の神宮寺である神護寺跡の存在が予想されたため、調査対象地内に計14ヶ所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。

調査対象地域は枚岡梅林に隣接し、一帯は傾斜が緩やかな地形である。この地域は北西方向に派生する尾根の南斜面にあたり、水田として利用されたため、削平が著しい。そのために、対象地北側の尾根筋に近い範囲は全て地山まで削平されている。南側についても一部が地山まで削平されている。遺構の保存状態が良好な範囲は2基の古墳の周辺およびA・B1・B2トレンチである。Aトレンチでは溝状遺構を検出した。溝内から土師器が出土している(第23図1～3)。B1・B2トレンチでは柱穴、溝、土塙等を検出した(岡版14)。古墳の周辺は2基とも北側に池状の落ち込みがあり、周囲に入頭大の石材を積む。他に溝、柱穴、土塙等を検出した。Aトレンチの溝状遺構は土師器から5世紀末と考えられる。他の遺構は、遺構内の出土遺物が少

なく、時期差は不明であるが15～16世紀と考えられる。出土遺物としては土師器、陶磁器、瓦があり、文献に伝えられている神護寺あるいは来迎寺の関連遺構の可能性が考えられる。調査対象地北側は前述したように地山まで削平されているが、遺構の一部が残っており、柱穴、溝、井戸等を確認した。時期は不明である。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦類がある。4・5号墳の遺物は、4号墳南トレンチ第3層より黒色土器、瓦器、須恵器が出土したのみで、他は15～16世紀の遺物である。ここではAトレンチ講状遺構内出土遺物と、4号墳南トレンチ第3層出土遺物を記す。

Aトレンチ出土遺物（第23図、1～3）

1は小形の丸底を呈する土師器の甕である。球形に近い胴部から短い外上方に伸びる口縁部を有する。口縁部は厚く、端部は丸みをおびる。口縁部内外面はヨコナデを施し、胴部外面はハケメを施したのちナデを行う。内面はナデを施す。胴部、底部外面に煤が付着する。灰褐色を呈する。口径15.0cm。2・3は製塙土器である。2は直立気味の短い口縁部を有し、胴部がわずかにふくらむ。内外面とも指オサエが顕著で、さらに口縁内外面をヨコナデ、胴部内面をナデで調整する。口縁部内面にひび状の亀裂が認められる。外面は2次焼成を受け赤褐色に変色した部分が認められる。赤茶褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。口径14.6cm。3は直立気味の短い口縁部を有し、胴部がわずかにふくらむ。口縁部外面に粗い平行叩きを施す。胴部上半は右上りの粗い叩きを施し、下半は指オサエの後ナデを施す。内面は指オサエが顕著で、口縁部にヨコナデ、胴部にナデを施す。器壁は非常に薄い。胴部外面に2次焼成を受けた痕跡が認められる。口径13.2cm。

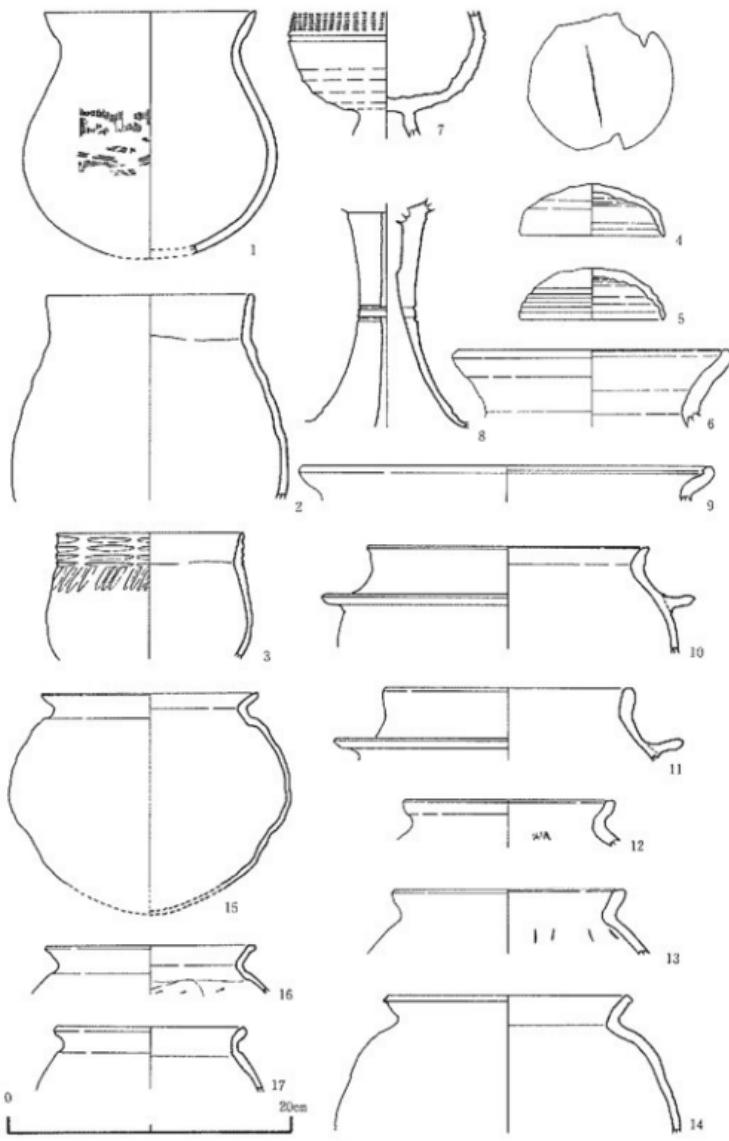
2・3は山陽地方に広がる製塙土器で、岡山県広江・浜遺跡等で多く出土している。広江・浜遺跡の報告^①では、古墳時代の製塙土器をI～V類に分類しており、2はI類、3はII類に当たる。胎土、形態から山陽地域からの搬入品である。5世紀末頃と考えられる。

4号墳南トレンチ第3層出土土器（第23～25図）

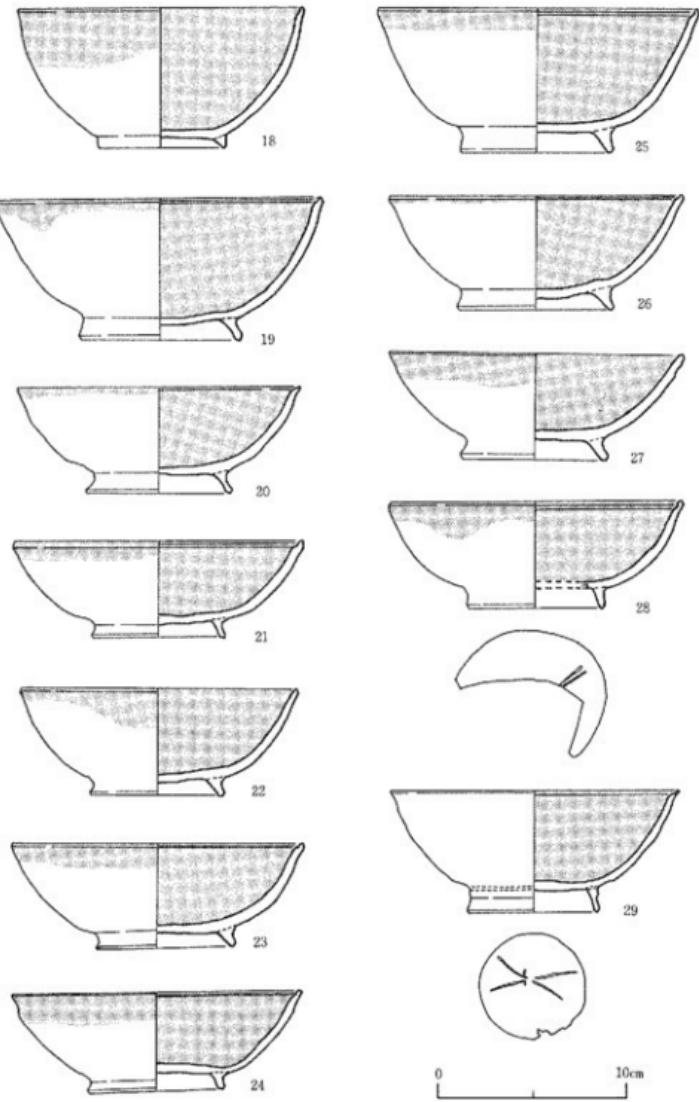
第3層内は黒色土器、瓦器とともにわずかながら4号墳に伴うと考えられる須恵器が出土した。

須恵器（第23図、4～8）4・5は蓋杯で小形のものである。腰は殆ど持たず口縁端部はややにぶい。4は天井部にヘラ記号が認められる。いずれもマキアゲ、ミズビキによる。6は甕の口縁部である。短かく外上方へのびる口縁部で、端部は丸く終わる。内外面ともヨコナデを施す。7は台付甕であろう。球形に近い胴部の中位に列点文を施し、直下に凹線を1条もつ。8は高杯の脚部で長脚化し、2段スカシをもつ。

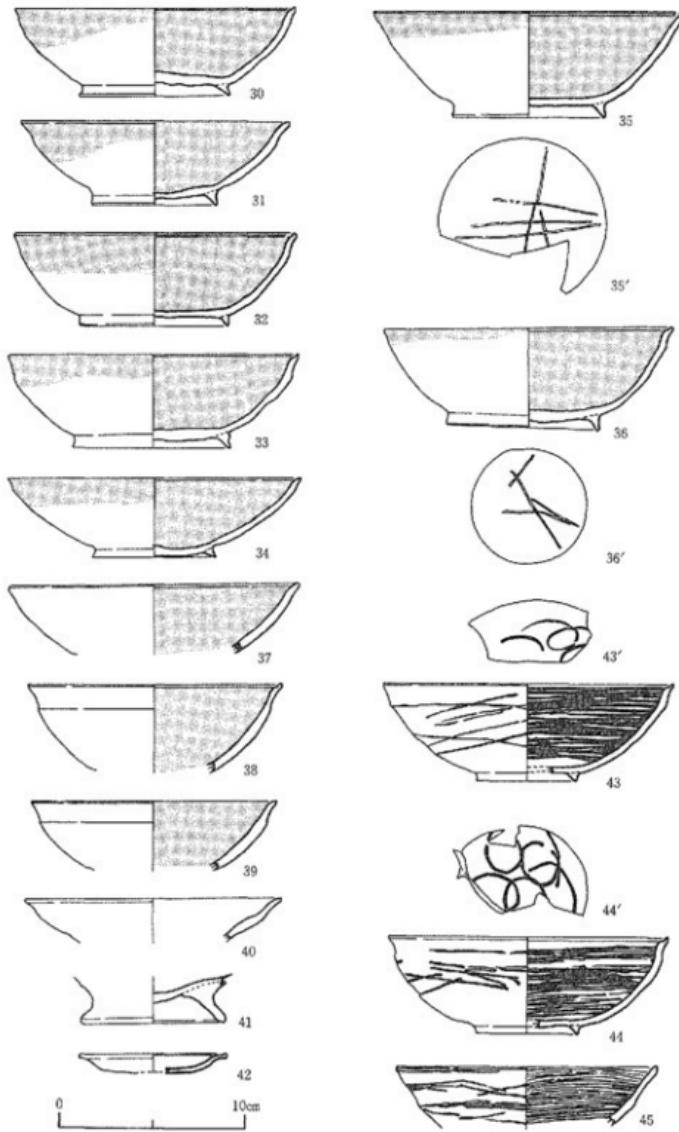
これらの須恵器は点数、器種が少なく不明瞭な点も残るが、中村浩氏の編年によれば、II型式第4～5段階にあたると考えられる。



第23図 遺物実測図（須恵器・土師器・製塩土器）



第24図 遺物実測図(黒色土器)



第25図 造物実測図（黒色土器・上部器・瓦器）

土師器土釜（第23図、9～11）

9はくの字形に強く外反する口縁部をもつ。口縁端部は内側に折り返す。淡褐色を呈し、大和に通有のものである。口径29.4cmを測る。10・11は菅原正明氏の云う河内B型に属する土釜である。^⑯くの字形に外反する口縁部で、9は端部を外側へわずかに引き出す。10は丸く終る。生駒西麓に通有の胎土を有する。口径20.0cm（9）、18.0cm（10）。

土師器甕（第23図、12～17）

12・13はくの字形に外反する口縁部を有し、端部は丸みをもって終る。胴部外面はナデ、口縁部外面はヨコナデを施す。14～17は球形に近い胴部にくの字形に外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は外上方へ引き出し、やや尖がり氣味に終るもの（15）、水平に面をもつもの（16）と、外面に面をつくるもの（14・17）がある。胴部外面はナデ、口縁部外面はヨコナデを施す。胴部内面はナデを施すもの（14・15・17）と、ヘラケズリを行うもの（16）がある。頸部外面は強いヨコナデのため稜線が明瞭である。

黒色土器（第24図、第25図、23～39）

黒色土器の出土量は第3層内で最も多い。B類はなくA類のみ確認した。^⑰今回の出土例では、形態、法量からA1～A4の4タイプに分類した。

A1タイプ（20～29）は、断面台形を呈する高い高台を有するもので、口径14.4～15.6cm、器高5.2～6.0cmを測る。平らな底部から内窵し口縁部に至る。口縁端部はヨコナデにより引き出す。端部内面に沈線を施すもの（20・21、23～26、28・29）と、施さないもの（22・27）がある。端部外面のヨコナデによる稜線は不明瞭である。内外面とも緻密なミガキ、暗文を施す。高台は厚く、丁寧に貼り付ける。

A2タイプ（19・25）はA1タイプに比して法量が大きく、口径16.4～19.2cm、器高7.4～7.6cmを測る。調整等の大きな変化はなく、わずかにミガキ、暗文が粗くなる。

A3タイプ（30～36）は、断面3角形を呈する低い高台をもつもので、口径14.4～16.8cm、器高4.2～5.6cmを測る。A1タイプに比して器高が小さく、器壁が薄くなる。口縁端部はヨコナデにより、外方へ強く引き出され、尖がり氣味となる。端部内面に沈線を施すものが多く、（31）のみ施さない。内外面のミガキ、暗文は緻密である。沈線を施さない31と、このタイプの中では大形の35を除き、生駒西麓に通有の胎土を使用する。

A4タイプ（18）はA3タイプと同様、断面3角形を呈する低い高台を有するが、器高が7.4cmを測り非常に大きくなる。他の調整技法等は変わらない。生駒西麓産の土器である。口径7.4cm。

土師器台付皿（第25図、41・42）

同一個体と思われる。浅い体部に、しっかりとした高台を丁寧に貼り付ける。内外面ともヨコナデを施す。口径13.6cm。

土師器小皿（第25図、42）

浅い体部からヨコナデにより口縁部を水平に引き出す。端部は内面に折り返す形をとる。内外面ともナデ調整する。口径7.8cm。

瓦器椀（第25図、43～45）

43・44は口縁端部内面に沈線を施す。内面は密なミガキを施し、連結輪状の暗文を施す。外面のミガキは粗い。高台は低く、断面3角形を呈する。45は口縁端部が丸く終り、沈線を持たない。43・44に比して浅くなる。内面のミガキは密であるが、外面は粗雑である。

6.まとめ

今回の調査では古墳の規模確認を主な目的としたが、上層に15～16世紀の造構が存在する事が判明したため、墳丘の一部を確認するにとどまった。以下、判明した事を記す。

1. 4号墳・5号墳ともに墳丘の上部が削平され、正確な規模については不明である。石室の規模からみて20m前後になると考えられる。

2. 4号墳の築造時期は、南トレンチ第3層出土須恵器から、中村浩氏編年のⅡ型式第4～5段階と考えられ、6世紀後半頃と考えられる。5号墳は出土遺物がなく、詳細は不明であるが、石室の形態から4号墳に近い時期を考えたい。

3. 4号墳南トレンチ第3層は、周開が破壊されているため、いかなる成因で堆積したのかは不明である。しかしながら、周辺にこの時期の造構が発見されていない事から、4号墳の追葬時の閉塞、あるいは祭祀とも考えられ、今後の調査の問題点としたい。

4. 4号墳南トレンチ第3層出土土器は、10世紀頃と考えられる。瓦器椀については、上層の第2層が、第3層と近い疊層のため、調査中に混入した可能性が高い。

この中で黒色土器が多量に出土しているが、本稿では大きく4タイプに分類した。これらの形式は第3層の一括遺物であり、年代的差異を示すものではない。したがって、現段階では共伴として扱いたい。

5. 古墳以外のトレンチでは、柱穴、溝、井戸等の造構を検出したが、造構内の出土遺物が少ないため正確な時期決定はできなかった。包含層内の出土遺物から15～16世紀代のものと考えられる。また、遺物中に瓦が多く含まれていることから、前述の寺跡の可能性を考えられる。

註

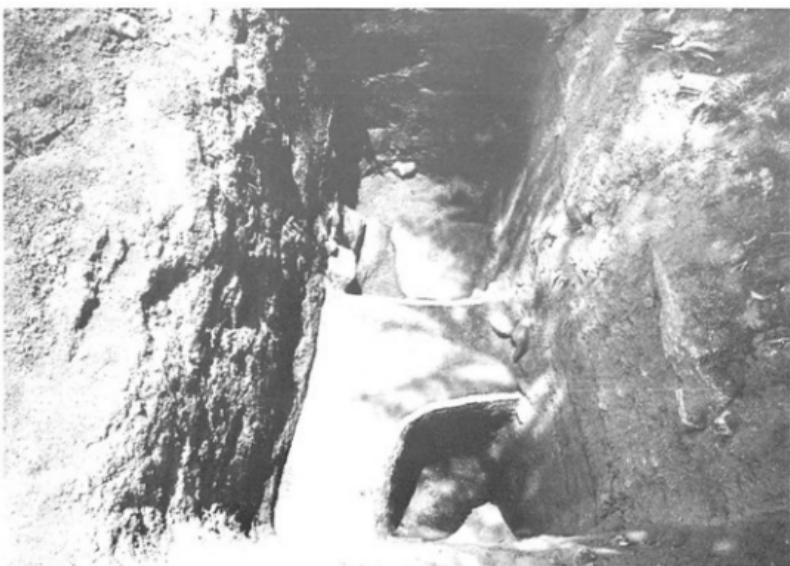
- ① 藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ「原始・古代の枚岡」第1・2部『枚岡市史』第3巻史料編 枚岡市史編纂委員会 1966。
- ② 1号墳は①前掲書において「丸山古墳」と呼ばれており、従来より単独墳として考えられていた古墳である。
- ③ 野原浩一「私の郷土一出雲古墳群概要」『埴輪』No.17 和歌山大学考古学研究会、1982。野原氏を中心として2・3・5号墳の石室実測が行われている。
- ④ 堅田直「東大阪市曰下遺跡調査概要」考古学シリーズ2 帝塚山大学考古学研究室 1967。
- 吉村博恵「千手寺・曰下遺跡発掘調査概報」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要24 東大阪市教育委員会 1983 他。
- ⑤ 下村晴文「芝ヶ丘遺跡発掘調査概要」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』 東大阪市遺跡保護調査会 1981。

- ⑥ ①前掲書
- ⑦ ①前掲書
- ⑧ 「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』 大阪府立花園高校地歴部 1970。
- ⑨ 下村晴文『鬼塚遺跡発掘調査概要Ⅰ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17 東大阪市教育委員会 1978。
宇本龍裕『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡発掘調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵調査概要19
東大阪市教育委員会 1979。
- ⑩ 関東大阪市文化財協会によって1982年に実施された発掘調査で検出。
- ⑪ 同上 忠彦・間瀬英子・藤田恵司・小野一臣「庄江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 倉敷考古館 1979。
- ⑫ 中村浩「關邑Ⅰ～V」 関大阪府文化財センター 1978～1980。
- ⑬ 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983。
- ⑭ 田中 球「Ⅲ古代・中世における手工業の発達 1 窯業 (4)畿内」『日本の考古学Ⅳ 歴史時代上』 河出書房新社 1967。
- ⑮ ⑫前掲書

図 版



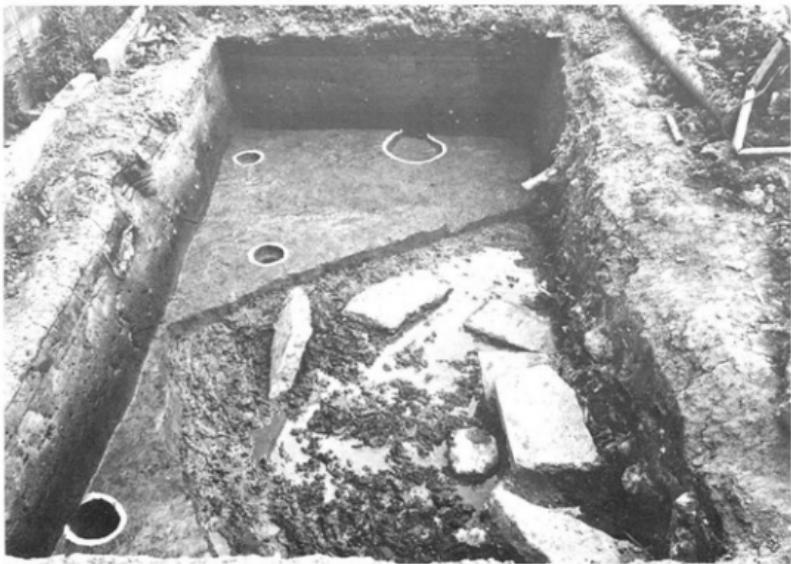
1. 第1トレンチ ピット1・2



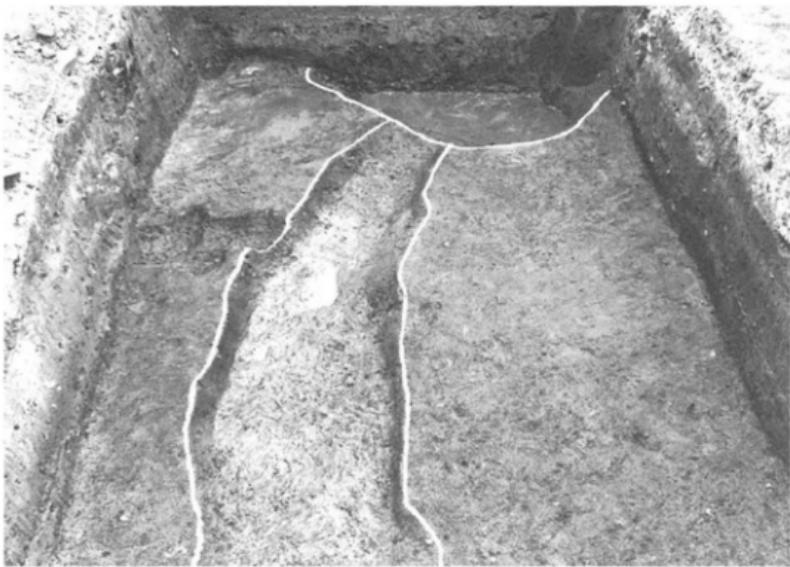
2. 第2トレンチ 落ち込み1、土塁1



1. 第1トレンチ 溝1



2. 第1トレンチ ピット1~4



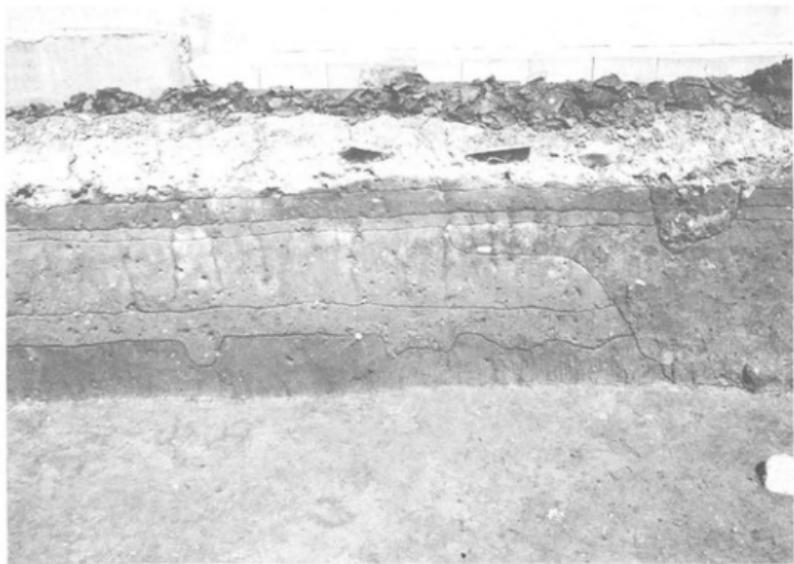
1. 第2トレンチ 溝2、土塁1



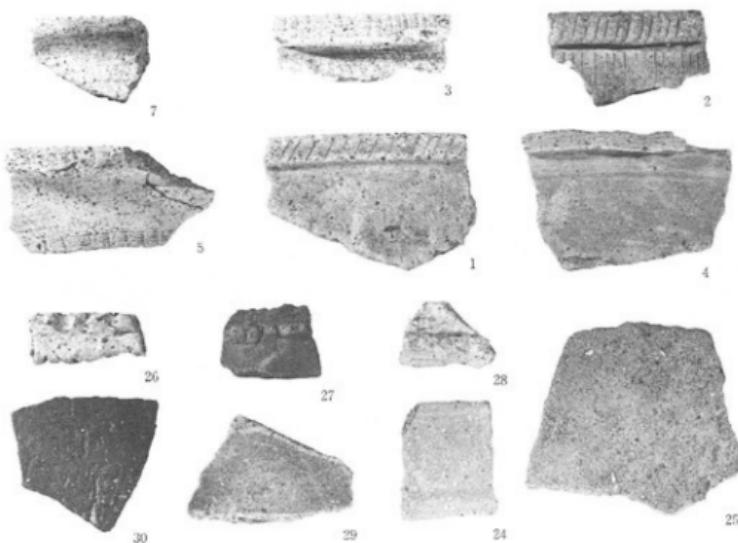
2. 第2トレンチ ピット5~8



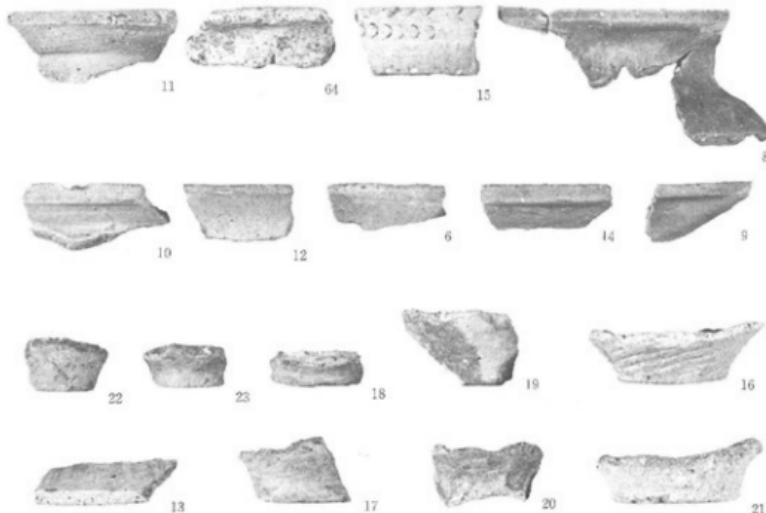
1. 第3トレンチ 土塙2・3、ピット9~13



2. 第2トレンチ 東壁断面

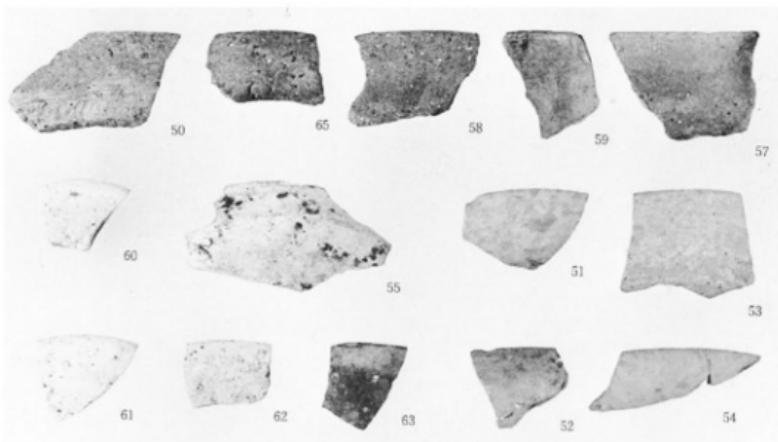


1. 繩文土器、弥生土器

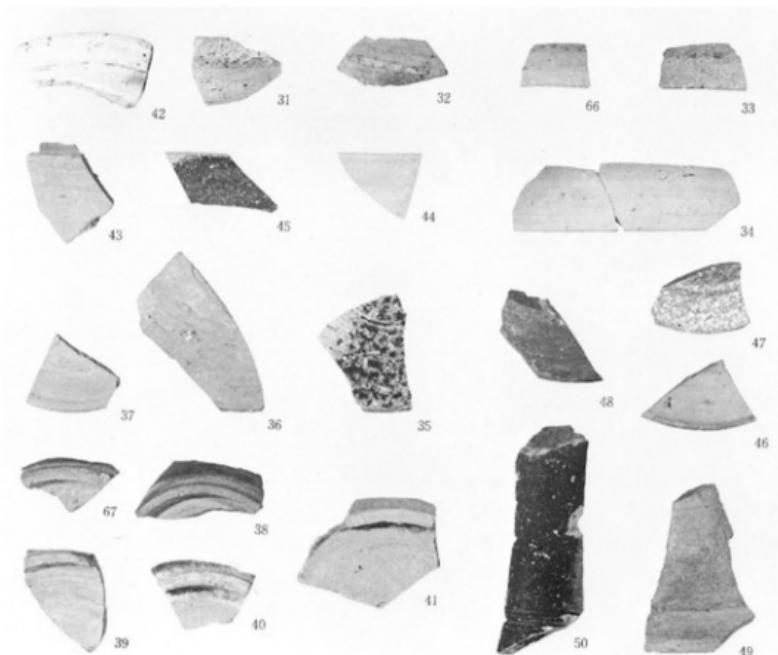


2. 弥生土器

圖版 6
鬼塚遺跡遺物



1. 土師器、瓦器



2. 須恵器



調査地全景（東より）



2. 調査地全景（西より）



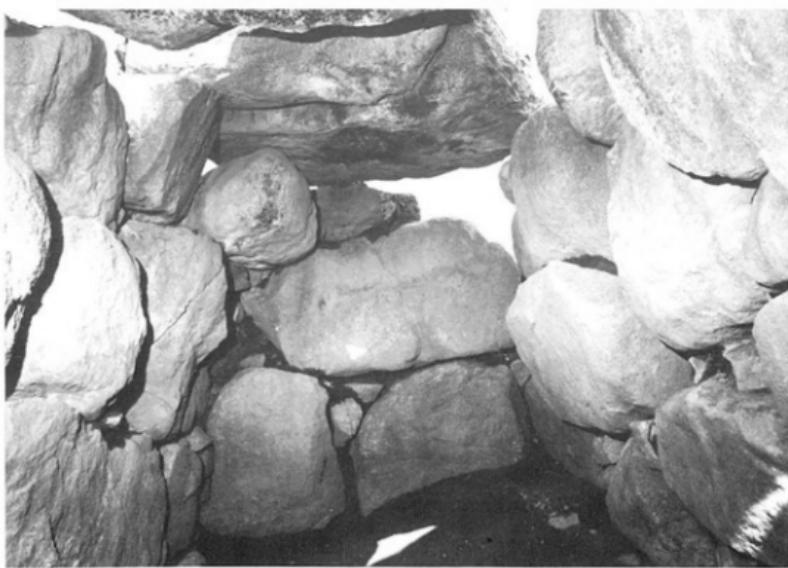
1. 4号墳全景（西より）



2. 4号墳南トレンチ第3層疊出土状況



1. 5号墳全量（西より）



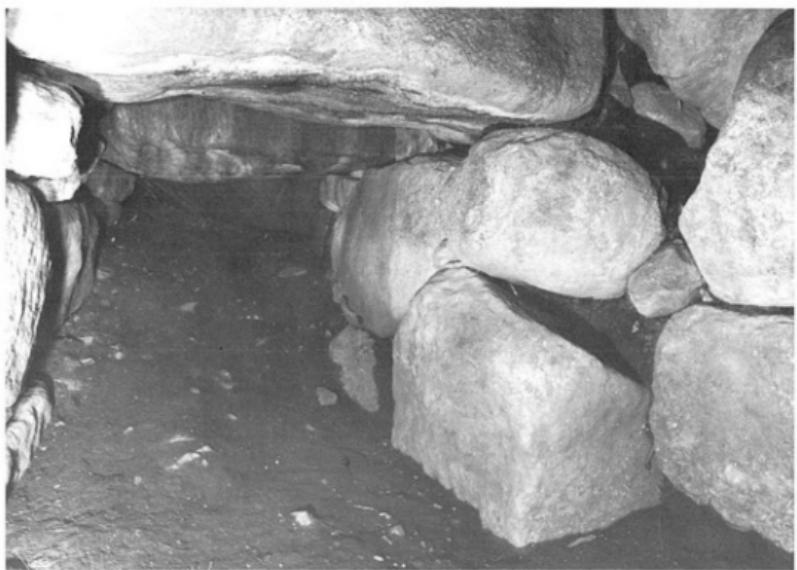
2. 5号墳奥壁



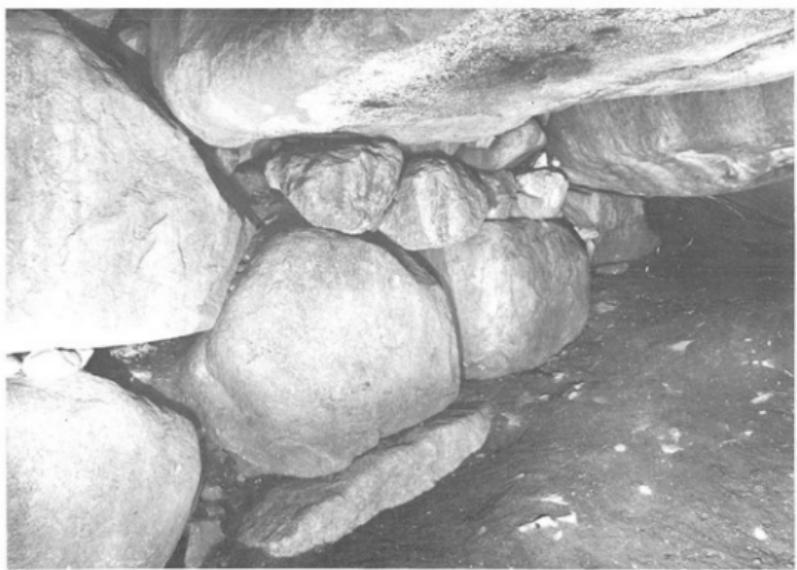
1. 5号墳玄室右側壁



2. 5号墳玄室左側壁



1. 5号墳羨道左側壁



2. 5号墳羨道右側壁



1. 5号墳玄門部



2. 5号墳玄室天井石



1. 5号墳東トレンチ裏込め石検出状況



2. 5号墳北トレンチ墓址検出状況



1. B1 トレンチ遺構検出状況



2. 4号墳NE区遺構検出状況



18

7



19



20

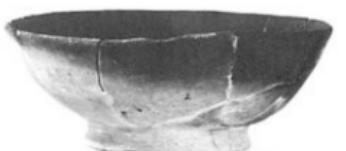
8



21



15



22

須恵器、土師器、黒色土器（4号墳南トレンチ第3層出土）



25



26



23



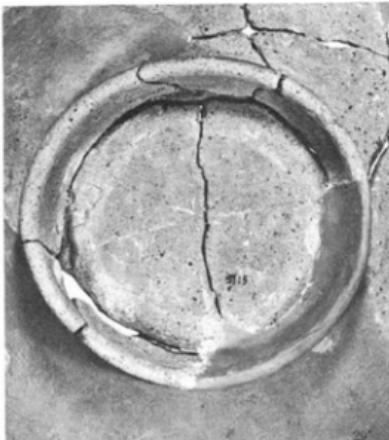
27



29



35



29

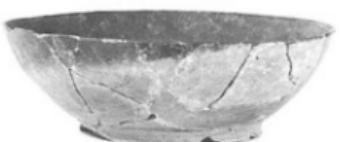


35

黒色土器（4号墳南トレンチ第3層出土）



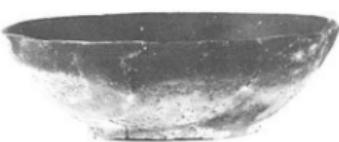
24



33



28



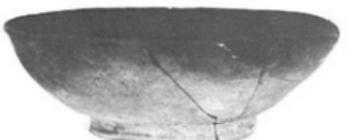
34



30



36



31



43

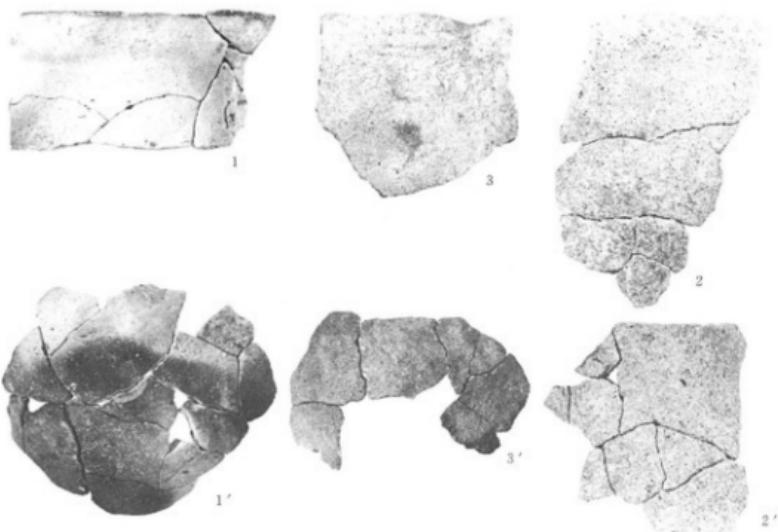


32

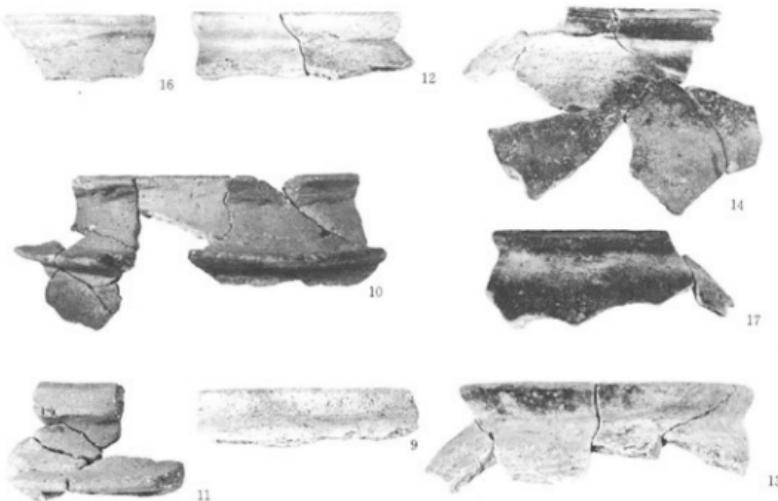


44

黒色土器、瓦器（4号墳南トレンチ第3層出土）



1. 土師器、製塙土器（Aトレンチ出土）



2. 土師器（4号墳南トレンチ第3層出土）

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要25
馬場遺跡・鬼塚遺跡・出雲井古墳群発掘調査概要

昭和59年 3月31日

発 行 東 大 阪 市 教 育 委 員 会

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所